

京都秋季特別集会 祈祷会 (奥田昌道宅にて)

求めよ、さらば与えられん

——マタイ伝7章7～8節——

1975年11月23日

小池辰雄

無条件の求め キリストを求め ン キリストが与えられる あるがままの自分をキリストに投げかける キリストへの捨て身 小キリストに私は成る 聖霊を賜らざらんや 本当の魂の教育 捨て身の愛 沈黙の祈り

【マタイ7】

7 求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 さらば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。12 さらば凡て人に為^せられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法^{おきて}なり、預言者なり。

● 無条件の求め

マタイ伝7章7節、

7 求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。

こういう言葉を読みますと、キリストの言葉は何と簡単であるか。

「こういう時には求めなさい。こういう場合には与えられる」

とか、時と場合なんて言うことを何も言っていない。無条件です。無条件の求めです。

「いつでもいいよ、どこでもいいよ」

と。こういう所で求めなさいとか、何とかかんとかはない。イエス・キリストは非常に簡単に断言的である。ということは、何か限定しているということではなく、その言葉が無限の広さと無限の深さを持っている。時と場所によって限定されない。無限定なる求めです。

「求めよ」という。



「何を求めるんですか？」
と聞きたいですね。何も書いてない。

「すべて求める者は得る」
と。無限定でありますので、

「こういうものを求めたら良いが、こういう場合は悪い」
なんていうことは言わない。どうしてそうですか、皆さん、わかりますか？ キリストという人は、無条件に全的に臨んでくる者は全的に受けとられるんです。

「お前はこれだけ悪いことをしたから、こんな過去があるから、ちよつと待て」とは言わない。どんな過去が有ろうが無かろうが、そんなことにかかわりなく、

「求めよ、然らば与えられん」

という。時と場所と過去のことかどうであろうと、周囲がどうであろうと、また運命環境がどうであろうと、そういうようなことは全部いらん。どのような事態であっても、本当に求めるということが分裂のない、全身的な求めであるということ。それがこの「求めよ！」という気合なんです。

「全存在で求めよ！」

ということ。言葉に何も条件が無いということは、「全的である」ということです。

「全的に求めなさい、必ず与えられる」

と、全部キリストが引き受け給うんです。だから、「求めよ！」と言う。

●キリストを求める

8 すべて求める者は得、尋ぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。

先の7節には、

「求めよ、然らば与えられん」

と、書いてあることに気をつけなくてはいいかん。後の8節では、「与えられん」ではなくて、「得る」と書いてある。「求めよ、然らば与えられん」、これは神さまの方、キリストの方で、与えようとしていらつしやる。それを今度はこつち側の角度から、受身でもって与えられる、即ちすべてこれは受けとるものだという。受けとるものを、後の方ではただ「得る」と書いてある。

「求めたら、お前はそれを獲得する」

というように意味の「獲得」というような気持で「得る」なんて思ったら、これは大間違いです。どこまでも、^{たまわ}賜るものなんです。

「求めよ、然らば賜るぞ」

ということ。

「求めよ、然らば賜るぞ」



これは尋ねれば必ず見出すような事態になるという。また、

「門を叩け、さらば開かれん」

これも開くんだ。門を叩いて——ぶっこわして開くんじゃない——叩いて、むしろ門はなかなか難しいが、こちらがぶつ倒れると開かれる。全存在でもって体当たりすると開かれる。今、私たちは祈祷会ですが、祈りの世界が正に、

「求めよ、尋ねよ、門を叩け」

です。そのような祈りである。祈りの世界で本当に求めなさい。何を求めるんですか。いろいろ求める直接のお願いもあるでしょう。直接のお願いの奥には

「キリストを求める」

ことです。

「私を求めなさい。私を求めれば、今、お前が具体的に求めようとしているものは、そこから与えられるぞ」と。具体的に

「求めたものが与えられる」

といって、ただそれだけを喜んでいたら、これは御利益^{ごりやく}信仰になる。与えられないと、

「何だー！」

ということになる。今、具体的に求めたものが与えられようが与えられまいが、その奥に必ず与えられるものがある。それはキリスト自身です。キリスト自身は無条件に与えられる。

「然らば与えられん」

とは、

「私をやるぞ。私を求めてごらん。私は無条件にお前にやるぞ」

ということですよ。キリストを戴くと、今度は具体的に求めたものが、そこから力を得て、ただけることになる。それはいついたただけるか知りませんよ。直^{じき}かもしれないし、何日か後かも知れないし、死んでから後かも知れないし、これは分らん。

結果を問題にして求めるような求め方は、信仰が躓く。求めて与えられようが、与えられまいが、神さまが一番根源的には与えておられる。キリストを受けとった限りは、必ず与えられる。自分の祈り以上に、いや実に祈りに反したのも与えられるかも知れない。いいですよ。それは神の御意はもつと深いから。こういう信仰が一番凶^{あや}太い信仰なんです。こつち側がどんなに破れても差支えない。神さまから下さるものは、その破れ以上のものである。

●キリストが与えられる

私は、今度の『無者キリスト』〔著作集第1巻、1975年10月刊〕の第三部の序言に書きました。「無的実存」の前書きのところですよ。283頁〜284頁、

「我々は自らこの無私の無には至り得ない。我執の罪びとだからである。それゆえ無的



実存の可能根拠はキリストの十字架の贖罪にある。この罪の贖いによって無私の根源現実を賜わるからである。そこに聖霊が臨むことによつて無即無限無量の質が現実となる。このような無は太陽の白光の如きもので、白光が一切の光彩をふくむ根源相である如く、無は無限定無量なるがゆえに一切の徳相の根源相である。この無はそれゆえ有の相対概念としての無ではない。対極を絶した絶対極である。「神は愛なり」というよりも「神は無なり」という方が本当は深い。何となれば、神は一切の概念的表現で限定しきれぬものではないからである。「神は無なり」とは、神は無限定者なり、ということである。パウロが、

「ああ神の智慧と知識との富は深いか、その審判は測り難く、その途は尋ね難し」(ロマ11・33)

といっているように、不可測の神である。神は本来「隠れて在す神」(イザヤ45・15)である。神意は深遠無量である。人間の合理的思惟(理性)でつなずかれるような神は神ではない。御利益的に拝まれるような神も神ではない。この惨憺たる人間界、自然界を傍観しているかの如きひどい神が神なのである。人間をして傍若無神の如くふるまわせて知らぬ顔の如き神が神なのである。」

というようなことを書きました。この頁は非常にこの本の中でもある一つの大事な頁です。私が今、凶太い信仰と言つた意味は、この今読んだところの事態なんです。即ち、

「もう遣り切れん。どうしてこうなんでしょう」

というような、こちら側から、

「何で私を捨てなされるか」

とキリストは言われた。そして、神は本当に十字架にかけてしまった。こんなわけの分からない、すべて不合理な神さまが実は本当の神である。それが一番深刻な愛を含んでいるところの神であるということ、私は言いたい。ですから、

「求めよ、さらば与えられん」

というこの

「与えられん」

は、何が与えられるかということ、

「キリストが与えられる」

ということだけは確かなんです。私たちにおいては、これは本当に有り難い。イエス・キリストは無条件に自分を与えようとしていらつしやる。実に十字架において与えていらつしやる。十字架において自分を本当に与えて、贖罪をしていらつしやっている。このキリストという方を求めれば、本当に「罪からの解放」ということ、「我執からの抜け」ということ、またその後から聖霊がくる。

ルカ伝のところに書いてある通りに、



「**求むる者に聖霊を賜らざらんや**」

と書いてある。即ち、「キリストを求めろ」ということは、最も具体的には十字架のキリスト、聖霊のキリストです。この

「聖霊のキリストを求めろ」

ことが祈りの一番の極致です。これだけは無条件に入れられる。

このキリストを求めろということを実当にしていけないわけですよ。

「求めよ、然らば与えられん。与えられるぞ、私はお前に私をやるぞ」

と。こっち側の何もいらん。全存在をもつてするだけです。

●あるがままの自分をキリストに投げかける

人間というものは、何か自分を立てているんだね、自分の意識や何かを。デカルトの、
「我思う故に我在り」

なんて、思つてばかり。その思いに絶することです。いや、混沌でもいいですよ、行き詰まりでもいいじゃないですか。行き詰まりをなぜ考えるんですか。行き詰まったら、キリストの所へ自分を投げかけたらいじゃないですか。

「どうも人は私をちよつとも認めてくれない」

とか、何とかかんとかと呟きがたくさんあるわけだ。そんなもの認められようが、それでどうなるんですか。私たちはキリストを本当に無条件に

「**幼児の如く**」

受け入れることです。

「**幼児の如くとはどういうことだろうか?**」

なんて、またすぐ考える。では、「**幼児の如く**」というようなこともよみましょう、そういうことを言うことも。

あなた方はあるがままでいいですよ。苦しければ苦しいまんま、悲しければ悲しいまんま。分裂したら分裂のまま、頑かたくななら頑かたくなまま。そのままキリストに投げかけてごらん下さい。これが「求め」なんです。求めるとは、自分の身をキリストに投ずることです。これが本当の求めなんです。

「よし！ あれを取つてやろう」

と言つて走つて行く。走つて行つてぶつかろうとする。走つて行ってキリストの中に自分を投げ入れることが本当の求めです。

「求めよ！」

とは、自分の全存在を、あるがままの存在をキリストに投げかけることが求め。そうしたら、キリストは抱き上げてくださる。

「よしきた。良く来た！」



と、キリストは言ってください。

そうじゃないですか。十字架上の片一方の盗賊が最後のときに、

「イエスよ、御国に入り給う時、我を覚えてまえ」

と言ったら——地獄の鬼が待っているんだ、地獄へ落つこちてくるのを。地獄に落ちかけていた盗賊を、もう口を開いていたこの鬼の、開いた口が塞がらないというわけだ——どっこい途中からキリストに連れられて天界に行つてしまった。「ああああ、おやおや」というようなわけだ、鬼の方でいうと。落つこちて行くかと思つたら、どっこい天界に昇つてしまつたんですよ、この片一方の盗賊は。

これが本当の求めです。自分を投げかけてしまう捨て身です。捨て身の求めです、正に。

「捨て身で求めろ、身を捨ててかかれ」

と。あるがままですよ。ひとつも整えてはいかん。整えたらダメですよ。むしろ、あるがまま、ということが無条件ということなんです。

「私は今こんなに悩んでいますので……。私はこんなに頑（かたく）なで……。私はこんなに滅入（めいじゆ）つてしまつて……。私はこんなにスランプで……」

なんて、何だつていいよ。そのままでもいい。だから、私は集会を休む人に、

「なぜ、集会に来ませんか？」

と言う。

「ちよつと、この精神状態がおかしいから……」

とか、どうして自分の側を整えようとするのでしょうか。皆さんは自信があるのでしょうかね。私は自信がないから、

「キリストはこんなにもして無条件に入れてくださるか」

と、全身が涙となる。全身が炎となる。そのようなことで、なるほど与えられます。即、与えられます、即に。

祈り会なんて、わけないんですよ。まず3、4秒で終つてしまふよ。祈り会の長いのはなんてウソだよ——嘘（うそ）というのではないけれども——もう祈り会なんて5分もあればたくさんだ。もう入つて向こうへ突き抜けてしまふ。突き抜けて地獄へ落ちないようにしてくださいよ（笑）。キリストの腕から突き抜けてしまつて、地獄へ落つこちたらしょうがないものな。案外長く祈っていると、疲れてしまつたりして——これは半分冗談（じゆんたん）ですけれども——そういうふうに非常に簡単なんです。

私はこの頃、簡単になつちやつたものだから、あまり長く話ができなくなつてしまつた。直（すぐ）結論（けつろん）に来てしまふ。

「お父さんの文章はすぐ結論（けつろん）にくるね。もう少し諄（じゆん）々とやらないと皆（みな）が分からないんだよ」

なんてね、家の息子が言う。私はもう始め（はじめ）が終り（すべ）で、直終（すべ）りになつてしまふ。



●キリストへの捨て身

それが「求め」です。わかりましたね、「求めよ」の気合が。「尋ねよ」も同じこと。言葉がちがうだけのはなしです。

「何処に居るかな?」

と思つて今度は尋ねている。どこを尋ねてもいいですよ。そこには必ずキリストが居らつしやるから。

「尋ねよ!」

と。キリストはどこでも来てくださるから。求めるのはキリストである。尋ねるのも相手はキリストである。「あの人に会おう」と思つても、なかなか見つからないことがあるけれども、キリストにはどこでも会える。

「エルサレムに行かなければダメだ」

なんていうようなことはひとつもない。まあ、エルサレム巡礼の悪口を言うわけではありませんけれども、何処でもキリストにお目にかかれる。

「門を叩け!」

これは十字架という門です。十字架という門を叩きます。そうすると、十字架という門はちゃんと開かれてある。そこで十字架という門にぶつかつてぶつ倒れると、どっこい開かれて、既にもう門の向こう側に入つてしまつている。手でノックするようなことではこの門は開かない。全存在で、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

というような角度の叩き方。みな捨て身です、キリストへの捨て身です。キリストへのですよ、外に捨てたつてダメです。キリストの中への捨て身です。よく「捨て身で」と言うけれども、キリストの中への捨て身が本当の力の世界へ入る門です。そうすると、

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん」

は全部、キリストであります。そのときにこの言葉が本当に化体かたいする。この言葉が私たちの魂に生きてくる。御言葉の、

「わが言は靈こゝろばなり生命いのちなり」

が即受けとられる。そうして、具体的な求めは、神さまが

「よしー!」

とおつしやれば、直すぐに聞いてくださるし。いいよどれだつて。就職で求めて、落つこちてしまった。いいよ、また別なものを下さるから、

「あれはちよつと間違つていた」

というわけで。どういふことになつたかつても、その角度で行くと、

「ああ、これは自分にとつて最善の道であつた。のつびきならない道であつた」



ということに後から気がつく。凶太い信仰ですよ、これは。どのような現実にも、運命環境に出つくわしても、

「これが最善であった」

と言えるようになる。神さまがなすことは、これは最善なんです。最善とはその人にとってですよ。比較の問題ではない。その人にとって最善ということは、

「何だ、あの人は。あんなになつちやつていて、あれで最善だなんて、どうかしている」

なんてね、そうじゃないですよ。「どうかしている」なんていうやつの方がダメなんです。最善のことは、

「キリストに在る」

ことが何といつたつて最善です。地上の幸福なんてたかが知れてます、こんなものは。よく、「しあわせ、しあわせ」

とやっているね。嫌になつちやうよ、地上の幸せばかり願っていて。それはどんなに幸せであつても、ちよつとも本当の幸ではない。祝福ではない。「グリュック」(Glück、幸福)であるかも知れないけれども、「ゼーリツヒカイト」(Seligkeit、至福、恵福)でない。聖書には「グリュック」という語はほとんどない。

ヒルティは『グリュック』(幸福論)という本を書いた。あれは逆説的です、ヒルティの本は。なぜヒルティは「ゼーリツヒ」(selig、恵福)と言わなかったか。まあ皆の人にわかりやすく言つたんでしょう。けれども、この言葉は聖書にはない。これは「ゼーリツヒ」です。「ゼーゲン」というのは「祝福」だから。

「恵福なるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

(„Selig sind, die da geistlich arm sind, denn ihr ist Himmelreich.“)

という。虚しいですよ、この世的に幸福であればあるほど、逆に。「いつたいこれは何だろうか?」

なんて、その後の空虚さというものを感じる。ところが、どんなに不幸そうに見えなくても、「この私の中のキリストを何ものとも換えることができるか」

という人が本当に恵福な人、天国人です。天国を中に持っているんだから。問題は、天国を中に持っているかいかで決まる。外側の幸、不幸なんていうことではない。そこまで魂が坐っていないとダメですよ。

●小キリストに私は成る

それでもうこの三つの言葉が私たちに化体しました。はっきり、キリストが与えられ、キリストという十字架の門が開かれたら、その先は聖霊の世界です。

「与えられたと思つたら御霊であつた。見出したと思つたら本当に天国であつた」



ということですよ。これが、

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

です。

「自分を何者としなかつたら、キリストという天国が汝のものとなった。わがものとなった」

ということですよ。

「すべて求むる者は得、尋ぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり」
なんて書いてあると、

「どうも、そんなことを言ったって、そうはなかなか行きませんよ」

なんてみな思う。それは内容の一番深いところを読んでいないから、そうは行かないんだ。行かないのが本当さ。そんなにしょっちゅうそう行ったら、御利益信仰になっちゃう。御利益信仰に躓かないために、キリストは余り与えてくれないよ。

勿論、祈りはいくらでも聞かれます。けれども、聞かれたということだけで満足してはいけません。聞かれたということによってキリストに連なることをしなかつたら、これは御利益になつてしまふ。聞かれようが聞かれまいが、キリストをそこで本當に得なければ御利益になる。いわゆる御利益信仰ではありません。

そうしたら、その人はキリストを与えられると、本當にキリストの栄光体となっているから、今度は「与えられん」どころじゃない。

「求めた者にお前はなる」

と言うんですよ。

「求めたものにお前は成るし、見出そうとしていたものもお前は成るし、尋ねて

いたものにお前は成ってしまうんだ」

と。私は、今日初めてこのことを皆さんに言います、

「その者に成ってしまう」と。

「我を見よ!」

と言うペテロと同じに、パウロと同じに、ヨハネと同じに、キリストと成る。小キリストに私たちが成っている。キリストはヨハネ伝で、

「お前たちは神々である」

とまで言われた。あの「神々」ということは、一人ひとりが本當に神の似像にすがたと成るといふ、

「我れ神の似像と成る」

ということですよ。

「我よりも大いなる業わざをなす」

とキリストは言われた。

「私はお前の中に入つて、もつと大きな事をするぞ。いや、世の末までも地の極はてま



でもやって行くぞ」

と。このキリストは、無数の人たちとなって進んで行く。キリストは正に多神、であります。そういうようなわけでありまして、あなたの方の中にみなキリストの姿が宿っている。これが「求めよ、さらば与えられん」とか言うけれども、

「皆そのものに成るよ」

ということ。成ってそしていよいよ成って行く。そして、「成る」というと、今度は人を成らしめていく。逆に成らしめていく。その人を通して同じキリストをそこに成らしめていく。成った者が成らしめていく。何とも言いようがないね、たのしい世界で、有り難い世界です。

● 聖霊を賜らざらんや

「10 魚を求めんに蛇を与えんや。 11さらば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物を
その子らに与うるを知る。」
たまもの

お前たちはダメだけれども、でもいいものは子供にやるね、

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。」(マタイ
7・10～11)

ルカ伝の11章では「聖霊」と書いてあります。「善き物」とは何かというと、絶対に善き物は聖霊の外にない。絶対の善ですよ。善悪の相対の善じゃないですよ、これは。この絶対善なるもの、即ち

「聖霊を賜らざらんや」

と言う。「絶対」ということは、対を絶するのを、相手を絶するのを絶対と言う。言葉というのは、その原義でもってちゃんと捉まなければいかん。中間的な概念ではないですから。相手を絶するから、何処にもその相手をつくっていくんです。特定の相手を選んでいるのでも何でもない、絶対というのは。

そのようにして、相手を絶対的な者に化していく。絶対は絶対をつくるのであって、相対をつくらない。神さまはそのような絶対さで、私たちもまたそのような対極を知らないような、絶対者にされていく。みな成っていく。だから、求めるものが「与えられる」どころではなくて、「そのものに成る」ということを、ここでもうひとつキリストの言葉の奥を掴んでいただきたい。

12さらば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法
なり、預言者なり。
おきて

「福音なり」と言っている。

「人にせられんと思うこと」

とは一体何ですか。究極のことは、「愛されんこと」です。人間は一番根底において愛を求めています。愛に飢えていない人は、人ではありません。その人間が飢えているところの愛、



それを本当に満たしてくれるものは——恋人ではないんだ——キリストなんだ。恋人があつたつていいよ、悪くはないよ。けれども、恋人でもつてキリストを忘れたらお終いだ。

私は『無者』の中にも書いてある。

「³⁷我よりも父または母を愛する者は、我に相応しからず。我よりも息子また

は娘を愛する者は、我に相応しからず」(マタイ10・37)

と。この中に妻と恋人が抜けているから——女の方なら夫だね——私は入れてやった。キリストはこれを抜かして言ったけれども。とにかく、地上のどんな自分の大事な相手もキリストには替えられません。キリストを抜きにしてやっていると、溺れてしまう。

「我よりも何々を愛する者は我に相応しからず。自分自身をも憎まなかったら、

私の弟子となることはできない」

と。誰がこれに及第できますか。みな落第生だ。キリストはこういう物凄いことをおっしゃるから、そこらの道德の世界と違うですよ。私たちは、道德の世界もできないような哀れな人間ですよ。それで行き詰まってしまうて、終いには「自由、自由」と言って勝手気儘なことをやっている。そして、その自我のさばってしまうて、まあ日本はどうなるんでしょかね。冗談じゃないですよ。

● 本当の魂の教育

私は、東京の電車に乗ると、一番よくわかるんです、日本の姿が。若いのがのさばってしまうて、もう少し詰めればもう一人くらい腰かけられるのに、

「どうぞ、おかけなさい」

という気持もなければ、知らばつくれて寝てみたり、老人や子供を抱える奥さんが居ても、譲り合う奴もない。むしろ譲るのは歳をとった人です、逆に。どういうことですか。私は学校の生徒にはつきりそのことを言っています、

「お前たちはそんな青年になったらダメだぞ」

と。自我本位を自由と言い、それを何か知らんけれども、民主主義と思っているんだ。とんでもない話だよ。日本というのは精神的に最低国だね——最低だか何だか知らんけれども——とにかく顔落しています。気がついていてる教育家も一生懸命で言っているさ。けれども、言っているても、根底に在るものがないから空念仏になってしまう。そしてただパリサイになってしまふ。八方塞がりです。どうにもならん。

だから、福音を受けている方々に言うんです、

「あなた方が本当の魂の教育をしてください」

と。もう学校には期待できないから。私は、奥さんたちが本当の魂の教育をしてくださることを願う。偉大な方々のお母さんはみな魂の質がいい。ほとんど例外ないです。それくらい女性は歴史をつくるどころの大事な役割を持っている。



男女平等なんて、そんなことを言う必要は一つもない。男は男、女は女のそれぞれの大事な役割がある。どうしてこう妙な具合に歪んでしまったのかね。皆さんは本当に福音の世界の健全な素晴らしい構造をしつかり捉まえて、そして行ってください。どんな思想が来ても、それによって絶対動かされない。それは「堅い」ということではないですよ。自在にこれをオリエンティールン、位置づけながら、ちゃんと操作できるようになる。福音の世界とは不思議でしょうがない。

パウロはそれを持っていた。パウロは激しい物凄いことを言いながら、あとではちゃんと戒めている。あの戒めは、決して単なる戒めではない。福音の本当の舵取りをやっているんです。この健やかさといえば、福音ほど健やかな世界はないんですよ。

「パウロは非常に激しくて、一面的のように見える」

なんて、冗談言うなど。パウロは物凄い構造を持っている。知情意が本当に健全に使われる。ある時は情に深くあり、ある時は知の面で明晰である。ある時は意志の面でも力強い。それは皆、聖霊の力がやるんです。

●捨て身の愛

12さらば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。

ということとは、「愛せられたい」ということが、「人に為られんと思うこと」。だから、

「為られんと思うことを人にせよ」

ということとは、

「愛されたいと思うようにお前も愛しなさい」

と。愛するとは、人を助けること、救い上げること、荷うことである。黙って人の嫌がることをやって行くことである。そういうのが本当の愛です。黙々として——勿論黙らなくてもいい——とにかく自在にやって行く。人間の一番求めているものは愛なんです。

何ととっても東西古今の精神的な真理の最後は、孔子は「仁」と言い、お釈迦さんは「慈悲」と言い、キリストは「愛」と言う。みな共通なものなんです。これは人間の一番求めているもの。そしてそれは、愛の愛は生命いのち。生命は愛。それがまた霊でもあります。

「生命の生命は霊である」〔Des Lebens Leben ist Geist.〕

というゲーテの言葉がありますが、これは実はゲーテの女の友達の言葉です。ゲーテはそれを自分の詩の中に使ったけれども、そのように生命の生命は霊であり、霊の質は愛である。生命の質も愛である。その意味においても、何ととっても愛は究極のことで、これが一番人間が求めていることです。だから、

「その求めているものを人にやりなさい、与えなさい」

と。その愛は、人を愛し助ける極致は捨て身の愛である。

「人その友のために生命を捨てる。これより大なる愛はなし」



という。

「あの人が身代わりになってくれて、私の今日は在る」

と。これが本当に人を救って行く。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」

という。そうすると素晴らしいことになる。

手島さんは天界に行ってしまった。これが一粒の麦として倒れた。そうしたらば、あの群は手島さんが地上に居たよりも力強くなってきた。これは本当ですよ。

「では、小池先生も早く死んだ方がいい」

なんて(笑)。ちよつと待っててくださいよ。まだ死ぬわけにいかない。私はまだちよつと仕事がある。手島さんは天才的な人だから、人が百年たつてもしないようなことをやってしまった。私は鈍器だからね、のんびりとやっています。まだまだこれからちよつと仕事がありますからね。

「我がこと終れり」

という、キリストが「よろしい」と仰った時には、これは行かざるを得ませんが。

「凡て人に為られんと思ふことを人にせよ」

ということとは、

「本当に人を愛しなさい」

ということ。そうしたらこれは一番人を動かす。何と云ったって、愛の行為は千変万化、いろいろなものであります。

「これが愛である」

なんて限定できません。祈りの世界の極意がそこで大体お分かりと思います。そのように、

「自分をキリストの中に投げ入れることが、祈りにおける求めである」

ということです。

「求めは、投げ入れることである」

ということ。与えられたと思つたらそこに成ってしまった。そうしたらば、自然に人にそれが分身して行くようになる。別れて与えられて、人に与えられるように成っていく。クリスチャンというものはそういうものです。その信徒と成つてのち、じつとしているなんていうのは、これは澱んでしまつて腐つてしまふよな。

●沈黙の祈り

皆さんとまた、このような不思議な祈禱会を導かれて感謝致します。これから静かに祈ります。静かに深いという世界も大事なことです。お隣りが在るから余り大きな声を出したらお隣りに迷惑がかかる。私たちはどういふ環境に在つても決して、

「どうも、こういう所では祈り難くて困る」



なんてことはない。沈黙の祈りで一向差支えない。魂がそれだけの柔軟性を持つてこなくてはダメですよ。

空気を見て御覧なさい。この部屋の中が変な形になっても、あんな所に変な格子があっても、ちゃんと空気は中に入っている。そして、空気というものは、私たちの体の中まで入ってくる。私たちの血を奇麗にしてくれる。

この「四大」という地水火風というのは、本当に真理です。風は気です。

「天地正大の気」

という。水火風は三つとも霊なんです。聖霊は水の如く、火の如く、風の如し。地は一切を荷なっている荷いの愛です。どんな大建築だろうと何だろうと、どんな汚い物だろうとみな受けとつてしまう。そしてみな善用してしまう。大体、この自然界はみな循環している。円環関係です。水が天から降つて、遂に海に流れて、それからまた浄化して昇つていく。いろんなものを全部ここで育てていく。

それをいろんな化学的なもので処理して良いように思っていたところが、化学的に処理したら却つてそれは健全な自然界の循環を妨げてしまう。だから、公害現象が起きてしまったんですよ。

本当は肥料は人糞がいいんだ。化学肥料だの農薬だのを使うから、おかしなことになる。私は戦争中に肥やしを担いで畠でやったものだ。トウモロコシがいつぱいになりました。それからジャガイモやサツマイモも作ったよ。良くやったものだ、戦争の時は。サツマイモを担いで、機関車の真ん前に乗つて走つたもんだ。今では考えられないです、戦争の死ぬか生きるかという現実。二畳ほどの防空壕を掘つたよ。大きな梯子はしごを中にいれて、大事な本を中に入れた。

そういう「地水火風」、そしてもう一つ、「空」という言葉でもつて総括することもできます。この空は無と同じです。無はこの地水火風を全部総括している。空とか無とか、これは仏教の言葉で正にそうなっている。それを冥想している坊さんの口から、この地水火風の化身みだいのが出てきたという絵があるだろう。あれは「地水火風空」なんだよな。そういうわけでありませう。真理はそのようにしてこぼれている。

ですから、私たちが、
「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ！」
は全部、

「キリストを求め、尋ね、キリストの十字架の門を全身で叩く所に開かれる」

ということ。捨て身でもつて求めることです。キリストの中で捨て身して、キリストは絶対無条件にご自分を与えてくださっている。私たちをキリストにするんです。だから、今与えられるか、もうひとつ先の世界で成ると言いました。その小キリストに成るといことが本当に与えられるという世界です。キリストの弟子たちは、使徒たちは、



「我を見よ!」

と言った。ということとは、キリストと成っている。

「相対的なペテロの全体がキリストに成った」

ということじゃないですよ。中なるキリストでありますけれども、本当にそのところにキリストが中に現成げんせいしているわけです——これは仏法的には、「ゲンジョウ」と読むのでしょうけれども——現成している。そして、真理はそのように円現していく。浄土真宗のかなり深いやつが、私のものにやはり非常に共鳴しました。驚きました。どうぞ、皆さん、そういう気合でもって静かに深く、小川の細流せせらぎのごとく静かにそして深く、あるいはもう沈黙の祈りで、黙って祈ったつていいんだよ。そういう祈祷会もある。

手島さんとそうやったこともある。そうしたら、祈っているうちに自然に異言が爆発してきます。沈黙で祈っているうちに霊動状態に成ってきます。いつか軽井沢で若い連中7、8人とやった時にえらいことに成ってしまった。とにかく20才代の方々は大事な時期ですよ。本当に深く健全に入りなさい。そして「どうだ、こうだ」なんてね、ダメだよ、どうも青年というのは波が強すぎて。波はあつたつていいですよ、青年だから。でも、波ばかり見ていてはいかんですよ。波の奥の世界、波の奥の静かな世界、静かな深いそしてここには物凄い白熱的なものがある。地面の奥の方に在るでしょうが、地球の中心の熱が。だから、火山があるんでしょう。静かな深い物凄い白熱。この白の字が大事なんだ。

空気も無色透明、光も無色透明。これが無限の色を持っている、無限の味を持っている。水もそうです。一番喉が渴いた時、アイスクリームではダメなんです。これはもう真清水というのが一番いい。喉が渴いた時にビールを飲んで、「ああ、ビールはうまい」なんて(笑)。それはうまいだろうよ、けれどもこれは真清水には叶わんです。一番最後は、本当はこれが一番の味の素なんです。あの「味の素」の会社の味の素よりか、水の方が味の素なんです。聖霊の祈りの人はコーヒーや紅茶を飲んだらダメですよ。ダメとってたつて、

「コーヒー店に行きなさいな」

というのではないけれども、本当は朝や晩には水を飲むのが一番いい。祈りの世界は水がいいんです。色や味のついていないものはダメ、それで静かに深い、しかしながら、その白熱の事態を本当に受けとってください。これはキリストの中に自分を捨て身すればそうなるから。黙っていても、異言がほとばしつてくるから。

「異言が逆らないからダメだ」

なんて、そんなことを言っているわけじゃないですよ。そんな下らないことを私は言っているのではないですよ。では、祈ります……。

